

霊長類研究所におけるサル類取り扱い作業でのリスクアセスメントについての検討

前田典彦

京都大学霊長類研究所

1, はじめに

京都大学霊長類研究所は愛知県犬山市（愛知県北部）にある。大学本部（京都市吉田地区）とは離れていること、犬山地区として50名以上の労働者が勤務していることから、衛生管理者が選任されている。また、犬山地区は部局として霊長類研究所しかなく、よって単一部局として事業場衛生委員会が設置されている。

霊長類研究所では年に数回、労災事故が発生しているが、多くがサル類の取り扱いに起因するものである。事故の内容は咬傷・引っ掻き傷・病原体感染傷害に大きく分けられる。事故防止の対策として、事故発生時の危険要因に対する安全対策等により、危険要因は減少していると思われる。しかし、今後起こるかもしれない事故に対する危険予知に基づいた対策は十分ではない。この危険予知を行う手法として、リスクアセスメントの手法を用いることが有効かどうかを検討したい。

2, 背景

サル類を取り扱う作業は、研究や飼育管理に関係する研究者と技術系職員が行っている。サル類を実際に取り扱う際は、必ず「サル類取り扱い技能講習」を受け、「サル類取り扱いライセンス」の3段階認定のうち、2段階（グリーン）認定以上を取得することが必要である。毎年度初めには簡単な実習も行うが、それ以外の時期にはビデオによる説明と簡単な試験で取得可能であり、十分な実習は行われていないのが現状である。

霊長類研究所で飼育しているサル類は、南米原産の小型の種類からチンパンジーなど大型の種類まで含まれる。それぞれのサル類によって取扱う方法や要求される労働者のスキルや接触時間など、また目的が実験か飼育かによっても作業形態が異なるため統一したマニュアルの作成は難しいのが現状である。

3, サル類に起因する労災事故

平成20年に報告された労災事故は6件であった。その中でサル類に起因する事故は4件であった。サルから受けた傷害は3件で残り1件はサル飼育室内での打撲であった。研究者2名、技術系職員2名が事故に遭っている。

4, リスクアセスメントとは

「リスクアセスメント (risk assessment) とは、リスクの大きさを評価し、そのリスクが許容できるか否かを決定する全体的なプロセスのことである (Wikipedia)」。つまりリスクマネジメントシステムのサブプロセスとして、危険因子を予測し様々なリスクを勘案して評価を行うことである。

ここでは、報告された労働災害の事例から危険因子として作用したものを予想し、それらに対しリスク評価を行うことで、実際の作業現場への安全衛生に応用することを目指す。

5, 労働災害の実例

「観察ノート記入のため、網越しにえさ箱を覗き生餌の残量確認をする際、サル（テナガザル）のエサの取り口から伸びたテナガザルの手が、フェイスガードの隙間へ入り顔を向けた際、目にテナガザルの手が接触した」（一部文修正）このような内容の労災事故を事例にして進めたい。

この労災事故は、ケガこそほとんど無いが、サル生体の一部が粘膜にふれたことで、病原体への感染

のおそれがあることから、労災事故として扱い病院を受診した。

6、危険因子の洗い出し

不注意としてあげられるのが、テナガザルの動きに注意を怠ったことである。テナガザルの手が出て届く範囲に立ち入る際は注意することが必要である。テナガザルは名前の通りニホンザルよりも手が長く、また類人猿であることからとても賢い。フェイスガードをしていても、その隙間を狙い手を入れ危害を及ぼす可能性は十分にあり得る性質のサル類である。

不注意ということがかたづけられては事故は減らないので、不注意な行動も前提に、この事例の際の危険因子を検討してみる。

フェイスガードをしていても隙間から危害を加えられることもある。

テナガザルは手が長く、遠くにいても思っているより素早く近づき危害を加えられることもある。

ノートの記入など、周辺への注意が散漫になりやすい作業を飼育ケージ近辺で行うと危害を加えられることもある。

えさ箱はテナガザルが餌をとるため手が出るほどの穴をわざと開けているので近づくと危害を加えられることもある。

以上が危険因子として予想できることである。

7、リスク評価

リスク評価は、引地（第67回全国産業安全衛生大会研究発表「リスクアセスメントと学校の安全衛生対策」引地力男 鹿児島工業高等専門学校）の手法を参考にした。

No.	内容	ケガの程度	頻度	可能性	リスクポイント	備考
	フェイスガード	8	2	2	12	手が出る箇所は限定的であるしガードの隙間は狭い
	テナガザルは手が長く	8	3	3	14	手が出る箇所は限定的である
	ノートの記入など、周辺への注意が散漫	6	3	3	12	手が出る箇所は限定的である
	えさ箱の穴	10	5	5	20	手が確実に出る箇所である

表1 リスクポイントによる評価

リスクレベル	リスクポイント	評価	対策
	18 - 20	許容できない	物理対策が必要
	11 - 17	問題有り	マニュアルが必要
	6 - 10	多少	さらに注意する
	3 - 5	注意	注意する

表2 リスク評価

8、まとめ

のえさ箱の穴が「物理的対策が必要（）」とリスク評価で示された。以前から対策の必要性を感じていた部分であり、リスク評価でも示されたことになる。

以上のことから、リスクアセスメントは有効な手法であることが示された。ただしすべての危険因子について、統一的なリスク評価が可能かどうかには、様々な場面に対するリスクアセスメントの可能性をますます考えなければならない。また、本来は複数人でリスク評価を行うところ、今回は私単独でポイントを決定したので、今後リスク評価作業グループ等のメンバーを決めて行いたい。